

中国横断道予定地内
遺跡分布調査報告書

1923

育委員会

序

昭和53・54年度、当教育委員会では日本道路公団からの委託をうけて、中国縦貫自動車道計画地内の発掘調査を島根県西端の町、六日市町において実施し、貴重な成果を収めたところであります。

このたび、日本道路公団による新たな中国横断道（島根県浜田一広島県千代田間）の計画が具体化してまいりました。そこで事業計画と文化財保護との調和を図るため、ルート計画の予想される地内の遺跡分布調査を実施しました。

本書はその分布調査結果の概要であります。

分布調査を実施するにあたり御協力いただきました日本道路公団浜田工事事務所ならびに地元関係者各位に対して厚く御礼申しあげる次第であります。

昭和57年3月

島根県教育委員会教育長

水 津 卓 夫

例　　言

- 本書は昭和56年度島根県教育委員会が国庫補助事業として実施した中國横断道予定地内の分布調査報告書である。
- 本書は中國横断自道車道として計画された島根県浜田市から広島県千代田町間のルートのうち旭町から、瑞穂町に至る間について分布調査したものである。
- 調査は次の組織で行った。

調査指導　山本　清（島根大学名誉教授）

調査員　今岡　稔（島根県文化財保護指導員）

吉川　正（　　タ　　）

的場幸雄（　　タ　　）

勝部　昭（島根県教育庁文化課埋蔵文化財第1係長）

石井　悠（　　タ　　タ　　第2係長）

門脇　裕（　　タ　　（兼）文化財保護主事）

片寄義春（　　タ　　タ　　）

ト部吉博（　　タ　　主事）

畠山和男（　　タ　　（兼）主事）

調査補助員　秦　誠司（島根大学学生）

浦田和彦（　　タ　　）

岩井重道（　　タ　　）

事務局　武田友秀（島根県教育庁文化課課長）

藤間　亨（　　タ　　主査）

長谷川行雄（　　タ　　課長補佐）

岩崎況一郎（　　タ　　文化振興係長）

- 本書は主としてト部吉博が執筆し片寄義春・勝部　昭が輔けた。
- 本書の編集は主にト部吉博が行い、勝部　昭が輔けた。
- 図面の添書は小原明美、田根裕美子が行った。
- 内藤俊彦氏からは未発表のやつおもて9号墳出土の須恵器実測図の提供を受けた。また多くの示唆に富む教示を得た感謝したい。この図面はト部が図法を収めた。したがって、図に誤りがあるとすればすべてト部の責任である。
- 内田律雄氏からは瓦について有益な教示を得た。
- 本書の分布図に利用した地図は、日本道路公団作成の1,000分の1の地図を利用した。
- 調査中お世話をなった旭町教育委員会、瑞穂町教育委員会をはじめ、関係各位に厚くお礼申し上げる。

目 次

序

例 言

目 次

I 位置と周辺の遺跡	1
II 経過と調査の概要	4
III 各遺跡の概要	5
1. やつおもて古墳群、新塚古墳群	5
2. 重 富 遺 跡	10
3. 内 ケ 原 城 跡	14
4. 早水・中郷地区の遺跡	15
5. 桜 尾 城 跡	17
6. 堀 城 跡	17
7. 観 音 寺 原 遺 跡	19
8. 九 潛 山 鏊 古 墳	20
9. 郷 路 橋 遺 跡	20
IV ま と め	20

挿 図 目 次

第1図 中国横断道分布図調査位置	1
第2図 旭町重富地区付近の遺跡分布図	1
第3図 旭町市木、瑞穂町市木地区付近の遺跡分布図	2
第4図 上本郷遺跡、大迫古窯跡出土遺跡実測図	3
第5図 重富地区遺跡分布図	6
第6図 やつおもて古墳群第9墳実測図	7
第7図 やつおもて古墳群第9号墳出土遺物実測図	8
第8図 重富遺跡調査区概念図	10
第9図 重富遺跡調査区実測図	11
第10図 重富遺跡出土遺物実測図	12
第11図 重富廃寺、出土遺物実測図	13
第12図 内ヶ原城跡郭配置図	14
第13図 旭町市木、早水、中部地区の遺跡分布図	15
第14図 桜尾城跡郭配置図	16
第15図 堀城跡郭配置図	17
第16図 堀城跡主要部平面実測図	18
第17図 郷路橋遺跡分布図	19

図 版 目 次

図版1 (上) やつおもて古墳群・重富遺跡・遠景 (下) やつおもて古墳群 第9号横積穴式石室	
図版2 (上) やつおもて古墳群第9号横積穴式石室 (下) 新塚古墳群遠景	
図版3 (上) 重富遺跡発掘調査風景 (下) 重富遺跡第2調査区	
図版4 (上) 重富遺跡第1調査区 (下) 重富遺跡第3調査区	
図版5 (上) (下) 重富遺跡出土須恵器	
図版6 (上) 重富遺跡出土円面瓦、重富遺跡出土布目瓦 (下) 重富遺跡出土 須恵器(放射状タタキ)	
図版7 (上) 内ヶ原城跡掘切り (下) 早水遺跡遠景	
図版8 (上) 天代宝篋印塔群 (下) 高畠宝篋印塔	
図版9 (上) 桜尾城跡遠景 (下) 堀城跡遠景	
図版10 (上) 観音寺原遺跡トレンチ調査状況 (下) 郷路橋遺跡トレンチ調査状況	

I 位置と周辺の遺跡

中国横断自動車道は島根県浜田市と広島県千代田町を結ぶ陰陽連絡道として日本道路公团が計画したものである。

今回の調査はこの内、第8次区間と呼ばれている旭～瑞穂間の分布調査を国の補助を受けて実施したもので、那賀郡旭町今市から、邑智郡瑞穂町市木までの約15kmを対象とした。

旭町は浜田市から23.4kmに位置し、北に桜江町、石見町、東に瑞穂町、西に金城町、南に広島県が接する。瑞穂町市木は旭町今市から約13km南西に位置する。ともに中国山地の尾根を背にする町で、古くは砂鉄による鉄生産が行われている。

今回、分布調査の中心となつたのは旭町重富地区、市木地区と、瑞穂町市木地区である。

旭町内の本田地区と本郷地区に注目すべき遺跡が存在するので、若干記述しておきたい。
大迫古窯跡 この遺跡



第1図 中国横断道分布図調査位置



第2図 旭町重富地区付近の遺跡分布図 1:50,000

1. 大迫古窯跡
2. 新塚古墳群
3. やつおもて占墳群
4. 重富遺跡
5. 重富施寺
6. 上本郷遺跡
7. 福富宅
妻横穴群



第3図 旭町市木、瑞穂町市木地区付近の遺跡分布図

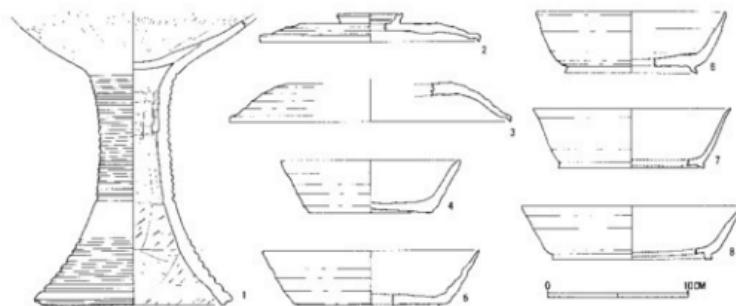
1 : 50,000

1. 内ヶ原城跡
2. 早水遺跡
3. 天代遺跡
4. 桜尾城跡
5. 鮎城跡
6. 観音寺原遺跡
7. 丸瀬山山麓古墳
8. 郷路橋遺跡
9. 鉄穴跡の蓋

機となつた堤の工事の時に西に張り出す尾根の一部は切り取られているが、旧地形を残す部分では、今なお須恵器が散在している。地形の状況からも窯跡と考えても差しつかえないものと考える。

器種は蓋、杯、甕、高台等であるが、今回は蓋、杯の一例を紹介しておく。（第4図2～8）蓋（2、3）はかえりのつくものではなく、いずれも口縁部が下方に短く屈曲している。調整はその大部分を回転ナデによって仕上げている。2は口径1.6cm、器高2.0cmで水平な天井部に輪状つまみが付く。つまみはゆるく外方に張り、端部は凹みながら内傾する。また、その内側には段状のアクセントが付く。この手のものは杯にも見られ、本窯跡の一つの特徴とも考えられる。3は口径20cmの大形品である。杯は高台の付かないもの（4、5）と高台の付くもの（6～8）とがある。前者の底部にはヘラ起し痕が残る。器形は体部から口縁部にかけて外方に直線的に開く。体部内外面の調整は回転ナデを行う。4は口径12.8cm、器高3.7cmで底部は若干中凹みする。5は口径15.5cm、器高3.8cmで底部は平底である。高台の付く杯は脚部が外方に張り、その端部が外面で接地する6、7と、直

は旭町木田上の原大迫に所在する。『旭町誌上巻』に第2次大船の頃木田で工事中に多量の土器が出土した旨の記述があるので遺物を旭町歴史民俗資料館で実見すると、ダンボール1箱分の土器があった。土器は全て須恵器で、焼成不良、焼けひずみのものが多く、遺跡は窯跡である可能性があったので現地を暗査した。遺跡は木田から和田に通じる古道に面し、大迫堤の東側にあって、谷の西側斜面に形成されたものと考えられる。発見の契



第4図 上本郷遺跡、大迫古窯跡出土遺物実測図

立して内外両面で接地する 8 とがある。いずれも体部内外面の調整は回転ナデを行う。6 は口径13.5cm、器高4.4cmで体部は若干丸味をおびる。高台内側には蓋 2 と同じアクセントを有す。7 は口径14.0cm、器高4.2cmで口縁部は若干外へ反る。8 は口径15.7cm、器高3.7cmを計る。

以上概要を述べたが、この地域の須恵器編年は確立されていない。現状では細かな位置付けは困難であるが、蓋の天井から口縁にいたる形態、杯の高台の接地部分の状況から、^{註2}陶色の偏光で4型式第3～4段階あたりに位置付けられ、概ね奈良時代後半頃の所産と考えてよきようである。

本郷上口遺跡 この遺跡は旭町上本郷字溝下に所在する。昭和52年に耕地整備中に弥生式土器が出土して明らかになったものである。その発見の状況については『旭町誌』に記載されているので、ここでは省略する。

弥生式土器は高杯形上器で杯部上半は欠失しているが、その他は完全に遺存している。杯部は内外面ともヘラ削り、脚部外面には凹線文を施している。脚部内面は上半部では横方向のヘラ削り、下半部では斜めのヘラ削りを行っている。杯部の底には円板が貼り付けられている。残存部の器高は20.2cm、接地面での脚端部の径は12.6cmである。弥生時代中期後半に位置付けられる土器である。

註1 『旭町誌』上巻 那賀郡旭町 昭和52年

註2 『陶邑III』 大阪府教育委員会 昭和53年

Ⅰ 経過と調査の概要

1. 経緯

中国自動車道に接続する中国横断道が島根県浜田市から、那賀郡金城町、旭町、邑智郡瑞穂町をへて広島県の中尾自動車千代田インターに通じるルートで計画された。この内、浜田市から旭町今市にかけては昭和55年島根県教育委員会が分布調査を実施したが、昭和55年6月には旭町今市から瑞穂町市木に至る第8次区間の関連公共事業調査が島根県に委託された。島根県教育委員会はこの時点で計画ルート沿いに存在する重富廃寺<島根県遺跡番号14-55>、やつおもて古墳群<14-54>、市木城跡（掘城跡）<18-3>等の周知の遺跡を報告したが、当該地域は山間部で分布調査も充分でなく、新たな調査が必要であった。こうした状況から島根県教育委員会は昭和56年度国庫補助を得て、このルート内の遺跡の実態を把握するため、一部試掘を含む分布調査を総額2000千円で実施した。

2. 調査の概要

当初調査は計画ルートの幅（500m）を計画していたが、実際には路線の中心杭、幌杭もまだなく、また海拔400mを超える急峻な山々に阻まれるなど充分な成果を上げ得なかった。そこで、比較的ゆるやかな丘陵の存在する地域を選んで分布調査を行った。また、踏査は昭和56年6月8日から開始し、断続的に今市・市木・重富・市木と実施し、9月には概ね遺跡を確認した。9月から10月末までの18日間で、分布調査の結果に基づいて重富地区で1ヶ所、市木地区で2ヶ所の試掘調査を実施するとともに、やつおもて古墳群の清掃・実測を行った。また、昭和57年3月には掘城跡の測量と補足の分布調査を実施した。

(1) 旭町重富地区 分布調査の結果、やつおもて古墳群は從来10基の円墳が確認されていたが、前方後円墳3基を含む18基からなる古墳群であることが判明した。また、同一丘陵上に広い範囲で須恵器、土師器、布目瓦を散布する重富遺跡を新発見し、その一部を試掘調査をした。その結果、奈良時代後半を中心とする遺物包含層を確認した。この包含層には円面鏡が含まれており注目された。

(2) 旭町市木地区 新たに内ヶ原城跡、早水遺跡、天代遺跡、天代宝篋印塔群、西の上宝篋印塔群、高畠宝篋印塔など中世から近世にかけての遺跡を確認した。

(3) 瑞穂町市木地区 鉄穴師の墓、銀音寺原遺跡（鉄穴跡）、郷路橋遺跡（散布地）を発見するとともに、銀音寺原遺跡と郷路橋遺跡で試掘調査を行った。

III 各遺跡の概要

1. おつおもて古墳群、新塚古墳群

やつおもて古墳群と新塚古墳群は南側を重富川と北側を本郷川に挟まれた南東から北西に派生する、なだらかな丘陵上に立地する。この丘陵は海拔約310m、水田面との比高差は約30mである。前者は旭町重富に、後者は旭町朝日に所在する。

(1) やつおもて古墳群 前記した丘陵の主丘部中央から南東にかけて存在する。立地は丘陵の尾根上と南側斜面に限られている。古墳の数は現在確認できるもので18基である。(表1参照) 内訳は前方後円墳3基、円墳14基である。古墳の分布は丘陵の西にまとまる1号墳～12号墳のA群と、東側にまとまる13号墳～17号墳のB群、さらにその東にあって、北に派生する尾根の基部頂上に単独で存在する18号墳がある。A群はさらに4つのブロックに分けられる可能性がある。

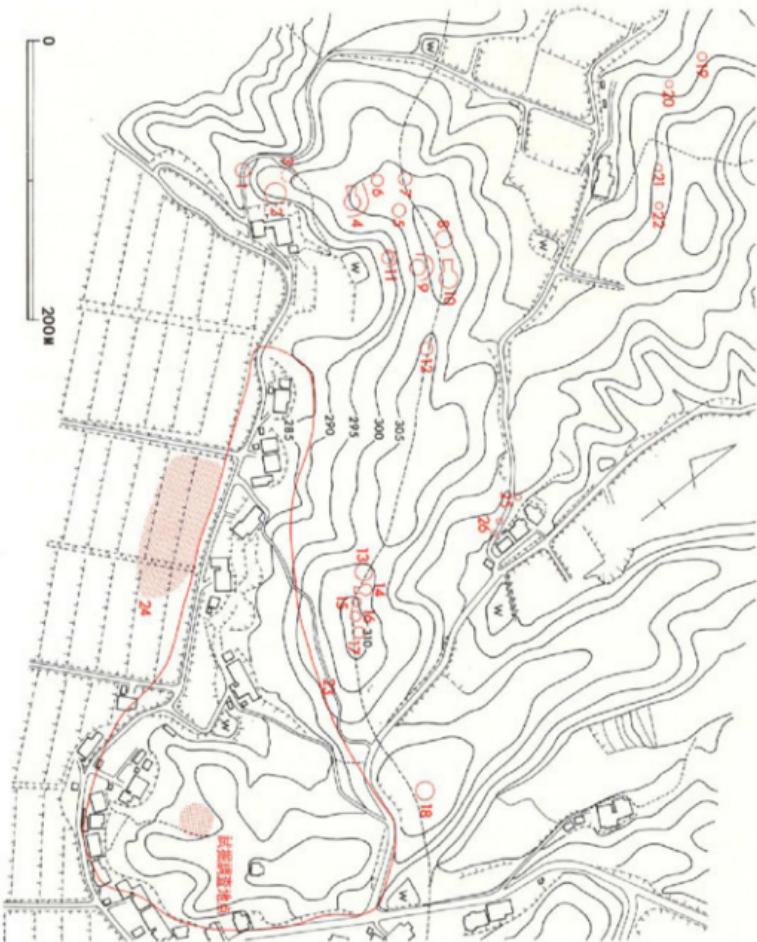
A群は、後世に石材利用の為の盜掘を受けているものが多い。これらの石材は石垣、家の束石、地蔵堂等に転用されたことを地元の人から伝聞した。墳丘は径10m内外の規模なものが多い。その高さは1.2m位のものが多い。急な斜面に占地している4号墳、9号墳、11号墳は古墳の形に合わせて斜面を削り取り平坦面を形成し、墳丘を築成していることが注意される。埋葬施設は、未掘の5号墳、7号墳、11号墳は不明としても、9号墳が無袖の横穴式石室で、他は石材抜き取り痕のある古墳や、一部石材の遺存する古墳であることから、大半は横穴式石室であったらしい。

B群はA群に比べて一段と小規模な古墳が多いが、全て丘陵の尾根上に占地している。未掘の古墳ばかりであって、埋葬施設は明らかでないが、14号墳と16号墳の墳丘には、石材が認められることから、この群も大半が横穴式石室である可能性が強い。

次に、今回消掃・実測を行った9号墳について、若干の記述を行っておきたい。

9号墳はA群の西側に位置し、南に向けて開く小谷の南斜面に立地する。墳丘はその北側を半円形に削り込んで造られている。円墳で径は約12m、高さは谷側では2.6mを測るが、尾根側ではほぼ水平となっている。本来は少なくとも1mは高かったと考えられる。

石室は墳丘のほぼ中央部に構築されている。天井部は持ち去られているが、玄室は比較的よく保存されている。床面のプランは長方形で長さ6m、幅1.6mを測り、南に開口する無袖の横穴式石室である。主軸は磁北に対して約7度西に振られている。石室前部には閉塞施設として利用されたと考えられる円礫が集積している。石室の規模は幅1.6m、奥

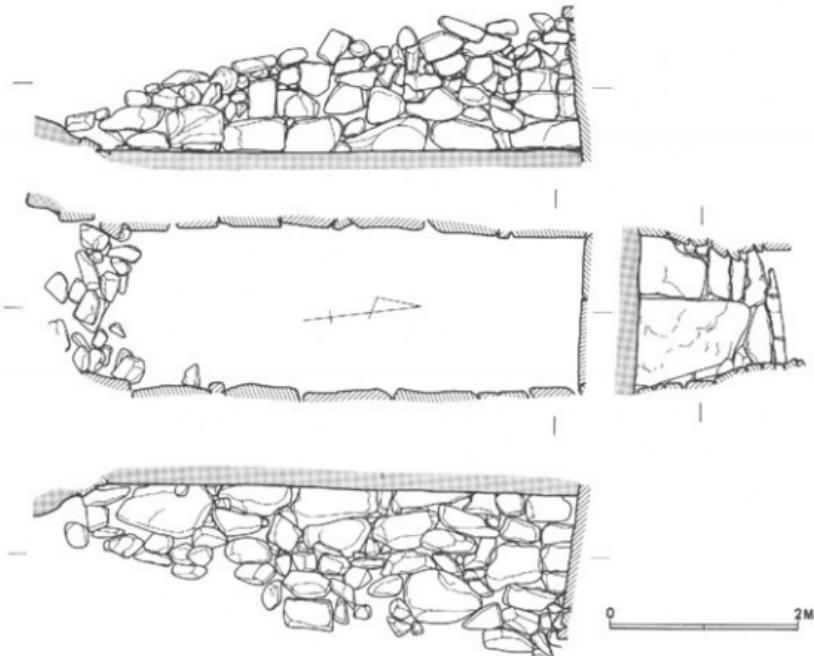


1. やつおもて1号墳
2. やつおもて2号墳
3. やつおもて3号墳
4. やつおもて4号墳
5. やつおもて5号墳
6. やつおもて6号墳
7. やつおもて7号墳
8. やつおもて8号墳
9. やつおもて9号墳
10. やつおもて10号墳
11. やつおもて11号墳
12. やつおもて12号墳
13. やつおもて13号墳
14. やつおもて14号墳
15. やつおもて15号墳
16. やつおもて16号墳
17. やつおもて17号墳
18. やつおもて18号墳
19. 新塚1号墳
20. 新塚2号墳
21. 新塚3号墳
22. 新塚4号墳
23. 重富遺跡
24. 直轄地守瓦田土地
25. 制日癸酉印跡
26. 烧土待ち込み

第5図 旭町立當地区
遺跡分布図

行き $5.6m$ (奥壁から閉塞施設までは $4.7m$) である。左右両壁は石を横に利用した腰石を置いた後、二段目までは横積みとしているが、3段目以上は乱れる傾向にある。また、左壁の腰石の奥から5番目の上には縦に積まれた石があり、それより前は石積みが乱れている。奥壁には大きな割り石を縦に使用し、その上部は比較的平らな石を横積みしている。奥壁、両側壁とも若干内側に傾斜している。各壁は奥壁では $1.6m$ 、右側壁では奥部 $1.74m$ 、中央部 $1.50m$ 、前部 $0.80m$ 、左側壁では奥部 $1.80m$ 、中央部 $1.32m$ 、前部 $0.62m$ の高さで遺存している。上部の保存状態のよい右側壁では、奥部から中央部までは比較的ゆるやかに傾斜するが、一転して中央部から前部にかけては急傾斜を示し、欠失して現存しない天井部の状況の一端を現わしているものといえよう。

今回の清掃作業においては、遺物を採集することはできなかった。また、かつて当古墳から出土し、学校に保管されていた遺物も散逸して現存しない。しかし、幸いなことに門脇俊彦氏が昭和35年に踏査された時の記録があることを知り、コピーさせていただいたの



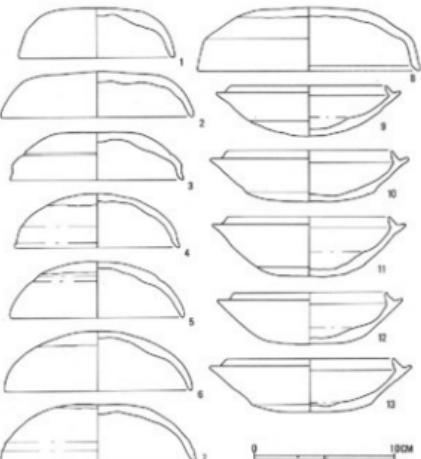
第6図 やつおもて古墳群第9号墳実測図

で、かいつまんで紹介したい。門脇氏の記録では保管されていた遺物は須恵器高杯1、蓋杯13、甕2、壺1、土師器杯5であったという。第7図に掲載したものは氏が実測された須恵器蓋杯である。蓋(1~8)は口の径10cmの小形のものから15.7cmの大形のものがある。口縁端部は丸く仕上げるものが多いが、8は内側に傾斜する段を持つ。杯(9~13)は口径10.7cmから11.7cmで底部外面はいずれもヘラ削りを行っている。立ち上がりは短く内傾している。9、11~13は立ち上がりにアクセントを付ける。

以上、出土須恵器を概観したが、これら須恵器には時期差を認め得ない。概ね山本清氏の山陰須恵器編年ではIV期に該当すると考えられる。

(2) 新塚古墳群 やつおもて古墳群A群の東側から北に舌状に延びる丘陵があり、新塚古墳群はこの丘陵の西斜面に立地する。やつおもて古墳群とは谷を隔てた位置に存在する。古墳の数は門脇氏の踏査された時点では7基確認しておられるが、今日の分布調査ではこのうち4基しか確認し得なかった。その内1号墳と2号墳は丘陵の先端が浅く入り組んだ西に開ける小さな谷に占地する。2号墳と4号墳はその南側の斜面に存在する。斜面の尾根側をカットして墳丘を築成する手法はやつおもて4号墳、9号墳、11号墳と共通している。墳形の確認できる古墳はすべて円墳で、その径は10mを超えるものはない。また高さも1mから2mでこの古墳群もやつおもて古墳群と同様に多くは石材を抜き取られている。このことから、新塚古墳群の埋葬施設は横穴式石室であったことは、ほぼ間違いないものと考えられる。古墳の立地と石材の遺存状態等から1号墳と2号墳の石室は西に開口していたものと考えられる。

(3) 小 結 以上、やつおもて古墳群と新塚古墳群の概要を述べたが、本末、新塚古墳群もやつおもて古墳群に包括して考えるべきで、新塚古墳群はその一支群と考えるべきものであろう。当該地域に22基以上の古墳が集中して存在することは注目に値することがらである。また、これらの古墳の多くは埋葬施設に横穴式石室が採用されていることは



第7図 やつおもて古墳群第9号墳出土遺物実測図

(単位はm)

番号	名 称	外 形			埋葬施設	備 考
		墳形	長さ	高さ		
1	やつおもて 1号墳	円 墳	径 9.5	1.6	横穴式石室 (2.2×3の抜き取り痕)	墳丘は山道により切断一部石材が残る
2	タ 2号墳	円 墳	径15.7	0.8	横穴式石室 (1.9×3.2の抜き取り痕)	墳丘は南側で削り取られている
3	タ 3号墳	不 明	—	—	横穴式石室 (2×3.5の抜き取り痕)	削平、一部に石材が残る
4	タ 4号墳	前方後 円墳	後円部径12.0 後円部高 3.4 前方部長 5.2 前方部高 1.3 全 長15.8	—	横穴式石室 <双室?> 前方部に1.8×2.5、 (後円部に2.1×5.7) の抜き取り痕	
5	タ 5号墳	円 墳	径 8.6	0.7	不 明	未 掘
6	タ 6号墳	タ	径 7.0	1.2	横穴式石室 (1.5×2.2の抜き取り痕)	
7	タ 7号墳	タ	径10.2	0.9	不 明	未 掘
8	タ 8号墳	タ	径11.2	1.2	横穴式石室 (2.0×5.2の抜き取り痕)	
9	タ 9号墳	タ	径12.0	2.6	横穴式石室 (天井部 欠失)	無袖
10	タ 10号墳	前方後 円墳	後円部径12.8 後円部高 0.6 前方部長 9 前方部高 1.3 全 長 21.8	—	横穴式石室 (不整形 な抜き取り痕)	側壁と考えられる石 側が露出
11	タ 11号墳	円 墳	径 8.2	1.3	不 明	未 掘
12	タ 12号墳	タ	径 8.3	1.0	不 明	未 掘
13	タ 13号墳	タ	径12.0	1.9	不 明	未 掘
14	タ 14号墳	前方後 円墳	後円部径 8.6 後円部高 1.1 前方部長 4.4 前方部高 0.8 全 長 12.2	—	横穴式石室?	未掘 後円部に石材
15	タ 15号墳	円 墳	径 4.3	1.1	不 明	未 掘
16	タ 16号墳	タ	径 6.8	0.9	横穴式石室?	未掘 墳丘に石材
17	タ 17号墳	タ	径 6.5	1.3	不 明	未 掘
18	タ 18号墳	タ	径13.0	1.2	タ	未 掘
19	新塚1号墳	不 明	—	—	横穴式石室	石材露出
20	タ 2号墳	円 墳	径 7.0	0.8	横穴式石室	一部石材露出
21	タ 3号墳	タ	径 9.5	1.0	横穴式石室 (2×4 の抜き取り痕)	
22	タ 4号墳		径 6.0	1.3	横穴式石室?	墳頂に石材露出

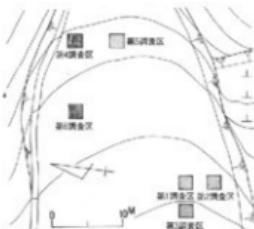
表1 やつおもて古墳群・新塚古墳群略測表

石見地方山間部においては特筆すべきで、同時に、古墳群成立がごく短期間であったことを示唆し興味深い。

註1 氏が昭和35年8月19・20の両日分布調査された時のもので、調査カード形式になっており、古墳群の分布図、古墳の形面表、石室断面図、遺物実測図が記入してある。

註2 山本 清「山陰の須恵器」(『山陰古墳文化の研究』所収 昭和46年)

2. 重富遺跡



第8図 重富遺跡調査

区概念図

重富遺跡は、南側に位置する遺跡で、土師器、須恵器、布目瓦等を広い範囲に散布する遺跡である。昭和48年整備中に軒丸瓦等が発見され、一躍、重富廃寺として注目を集めた場所はこの遺跡の南西の水田である。

重富遺跡の遺物散布は広範囲にわたっている。東は県道川所田府線に沿って下重富の切割りの西側丘陵から、西は県道の下重富から下本郷に通じる道路沿いに約40m、北はこの道路から直線距離にして約240mの範囲である。特に遺物が多いのはこのうちの東側の部分である。

(1) 試掘調査 今回試掘調査したのは重富297番地の阿瀬川貞義氏宅裏手に当る丘陵部分である。この場所は現在畠地で、尾根によって北・南・東の三方を開まれた馬蹄形の西に開く凹地である。調査は、 $2\text{m} \times 2\text{m}$ の調査区を6ヶ所設定しておこなった。その配置については、第8図を参照されたい。いずれの調査区からも遺物は出土しているが最も多く出土した所は第1・第2・第3調査区で第4・第6調査区では遺物の出土は稀であった。

第1調査区 地表下約1.8mまで発掘した。土層は粘性の強い土が整然と堆積しており、表上から8層で地山に達した。第4層は厚さ6cmか8cmの薄い層であるが、前後の層に比べて若干汚れており、一時期地表面であった可能性もある。また、V・VI・VII層では炭化物が多く含まれていた。遺物はどの層からも出土するが、V層の褐色土から比較的多く出土した。第10図4・5・6・7・11・13・14・15などはこの調査区から出土した。14・15はV層出土で、とくに14の円面鏡は注目される。

第2調査区 地表下約1mまで掘り下げた。この調査区では、第2層直下に段状の落ち込みが認められた。その深さは概ね45cmであった。第10図2・9・10・14・22・23が同調査区の出土遺物である。とりわけ、2・23は落ち込みの覆土であるIII層から出土した。

第3調査区 地表下約1.5m 掘り下げたが、地山には達しなかった。土層、遺物の出土状況とともに第1調査区とほぼ同じであるが地表下約1.2m掘り下げた所で、一部に、約10cmの厚さで赤褐色の粘質土が認められ、明らかに人工的な土層であることが判明した。このことから少なくとも、このVII層からVI層までは人工的に整地された土層である可能性が強い。

第4調査区 地表下、

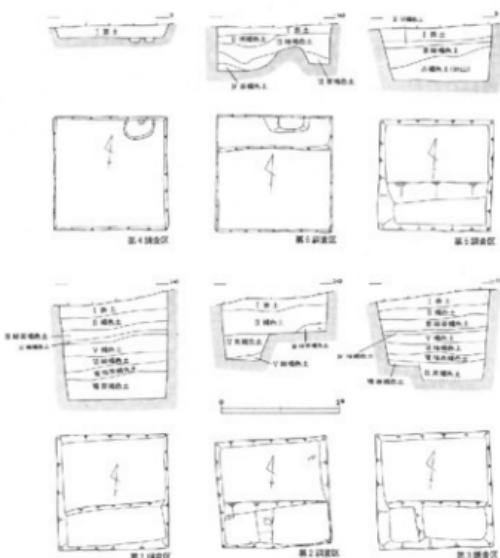
20cmで地山に至る。包含層は削平されており、耕土中から青磁片を検出した。

第5調査区 表土下、2層で地山に至る。 III層は西に向って傾斜している。須恵器細片などが出土した。

第6調査区 調査区北側の東よりの所で地山を加工した巾90cm、高さ40cmの畳状の高まりを確認した。 III層がこの高まりを包んでいたと考えられるが上部は削平されている。この高まりはほぼ、南北に走るものと想像され、気にかかる遺構である。

(2) 遺物 (第10図1~25) ここに掲げた須恵器と瓦のうち、調査区の説明ところで出土場所を明らかにしなかった1・3・8・10・12・13・24・25は採集品である。このうち、18は調査地点より東側の丘陵上で、また、24・25は、屋根を隔てた北側の谷から採集した。

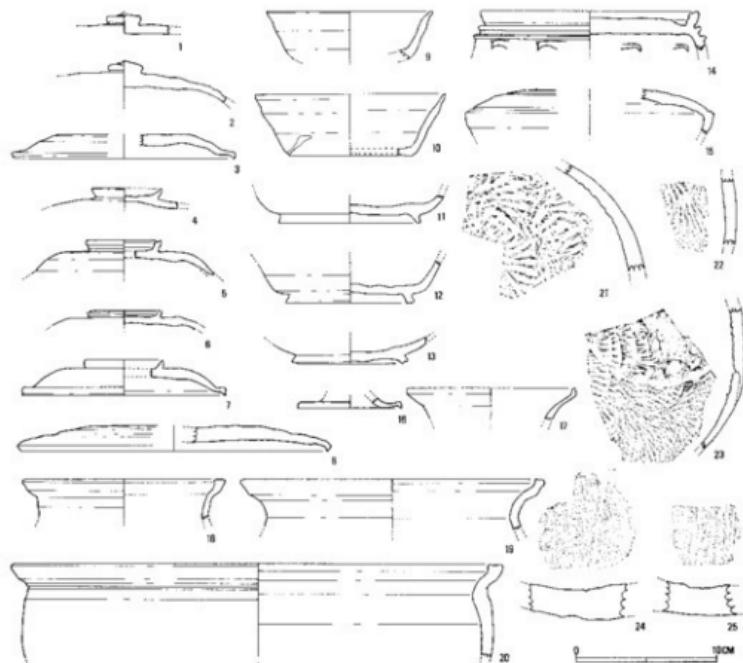
蓋(1~8)、环(9~13)、円面鏡(14)、長顎蟲(15)、高环(16)、長期蟲(17)、甕(18~20)、布目瓦(24~25)が存在する。蓋は擬宝珠つまみを付ける1・2と輪状つまみを付ける4~7とがある。口縁部は短く下方に折れ曲るもので、採集品にも返りの付くものは存在しない。天井部は1を除いて回転ヘラ削りを行っている体部口縁部とも回転ナデを施す。7は大追古窓跡に見られたつまみの内側に段のつく手のものである。环は高台の



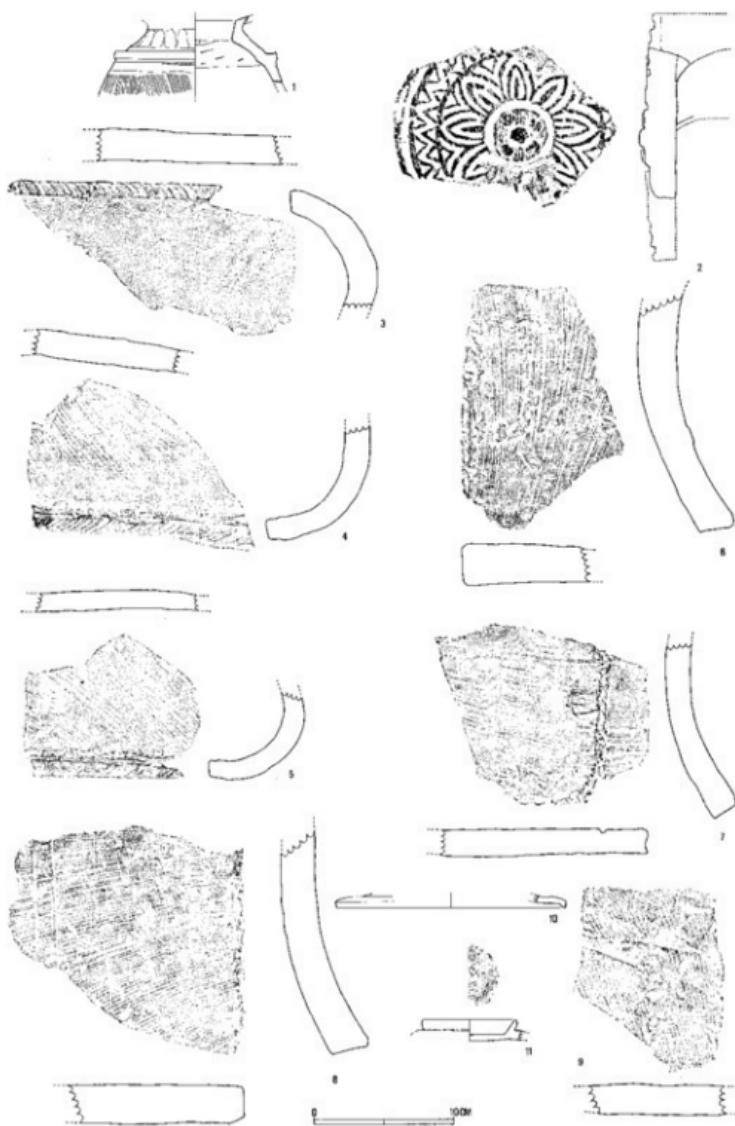
第9図 重富遺跡調査区実測図

付かない9・10と、高台の付く11～13がある。後者は脚の外側で接地する11と、全面で接地する12、内側で接地し、端部の凹む13がある。10は回転糸切り、他は回転ヘラ起し痕が認められる。円面観（4）は口径15.5cmで、脚部を失うも、その上端に透し痕が認められる。外面から内面にかけては回転ナデ、底部内面は仕上げナデを施す。隣には使用痕が認められる。縫は口縁部内側端部にアクセントをつけている。器形の不明な破片で内面に放射状のタタキを残す21～23がある。瓦は小片で明らかでないが平瓦と考えられる。凹面には成形時の布目が残る。凸面は縦にヘラ削りを行う。これ等、遺物は蓋のつまみの状況、壊の高台の形、底部の切り離しの手法などから若干の時期差が認められると考えられるが、概ね、奈良時代後半から平安時代にかけての遺物と考えてよさそうである。

（3）重富廃寺出土遺物（第11図1～11）　重富廃寺からは大量の瓦と、若干の須恵器、古墳時代前期に属する土師器が採集され町で保管されている。1は土師器の鼓形器台で脚部のみ残る。受部と脚部の間は短い。外面には横ナデと縦ハケを施す。内面はヘラ削りと



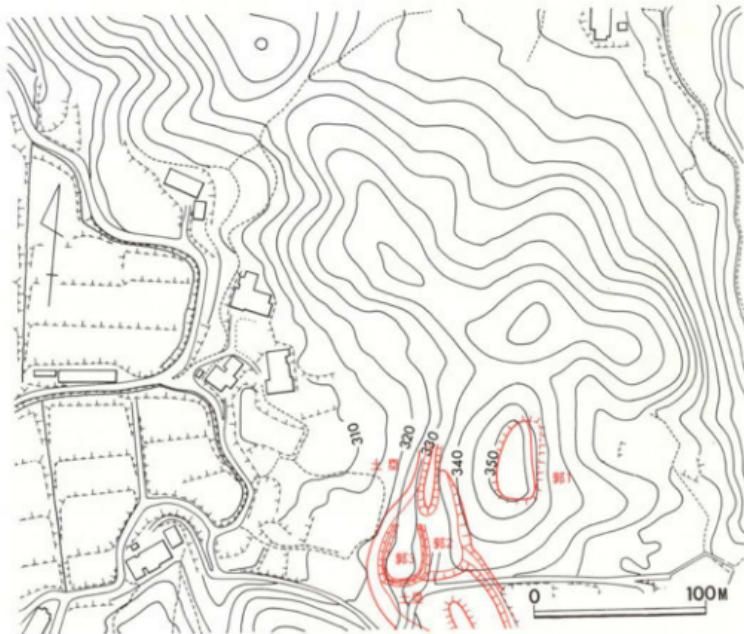
第10図 重富遺跡出土遺物実測図



第11図 重富庵寺、出土遺物実測図

横ナデを施す。地域色の強い土器である。瓦には軒丸瓦（2）丸瓦（3～5）平瓦6～9）がある。2は8弁蓮華文軒丸瓦で内区に中房と单弁を、外区に二重の鋸歯文を施す瓦当である。中房は径40cmで1+4の蓮子を配す。弁は凸線状をなす。外区鋸歯文も凸線状を呈す。瓦当の厚さは2.4cmである。丸瓦は厚さ1.4～2.0cmで、凹面には成形時の布目痕が残る。4、5には粘土切り離し時の糸切りが認められ、また端部は糸切りのままにしている。凸面は縦方向にヘラ削りを行っている。平瓦は厚さ2.0cmから2.8cmで、凹面には成形時の布目痕が残るものが多い。また粘土切り離し時の糸切り痕も認められる。桶巻き作りによったものと考えられ、模骨痕を留める9もある。7は後端部から2.2cmのところにひも状の圧痕が認められる。凸面はヘラ削りとナデを施すものがあって比較的滑らかに仕上げている。須恵器は細片であるが、いずれも蓋である。9は輪状つまみの内側に糸切り痕を残す。

3. 内ヶ原城跡 所在地 那賀郡旭町市木



第12図 内ヶ原城跡郭配置図

内ヶ原城跡は桜尾城跡のある位置からは八戸川を下流側即ち西へ2kmほどいった南側の丘陵上にある。川の流れる地点からは南側に300~400m入りこんだ位置である。

第12図は郭の配置図である。郭の主要部と思われる部分は既に鉄穴流しによって失われてしまったと地元の人はいっている。郭1は丘頂部を削って作った24×46mの広さをもつ郭、郭2は東西20m、南北60mを削り、周囲を削って作った長方形に近いプランをもつ郭、郭3は東西20m、南北40mのいくらか長方形に近いプランをもち、周囲を幅3m位の土塁が巡るものである。さらに、郭2、郭3を南と北の方向からはさむ形で、土塁がつき出ている。土塁の幅は5~6m、高さ2.5mのものである。この土塁はあたかも城館の内郭と外郭を区別するかのようである。

『旭町誌』ではこの内ヶ原城跡は早水城に比定されており、福屋氏関係の砦であったろうと推定している。

4. 早水・中郡地区の遺跡

(1) 早水遺跡 旭町市木早水所在

遺跡は主要地方道浜田八重可部線沿いで、その南側にあって、八戸川が市木から大きく蛇行して山際にぶつかるあたりに所在する。道路面から約8mばかり高い山裾に立地する。地目は畑で平坦面は約60cm×12mばかりあって、その平坦面に陶磁器片が散布する。

(2) 天代遺跡 旭町市木天代所在

遺跡は早水遺跡から直線距離にして、約300m程東に所在する。北に細く延る丘陵の先端に位置する。東と西には北に向って開ける細長い谷が存在する。遺跡の範囲は約50m×90mと考えられる。地目は水田で、巾20mばかりの段状の平坦面が4ヶ所程存在する。この平坦面には墓地も存在し、即身仏の墓と伝えられる石積みが存在する。この遺跡は立地の状況からして宗教的色彩の強い遺構も存在すると考えられる。

(3) 天代宝篋印塔群 旭町市木天代所在



第13図 旭町市木、早水、中郡地区の遺跡分布図

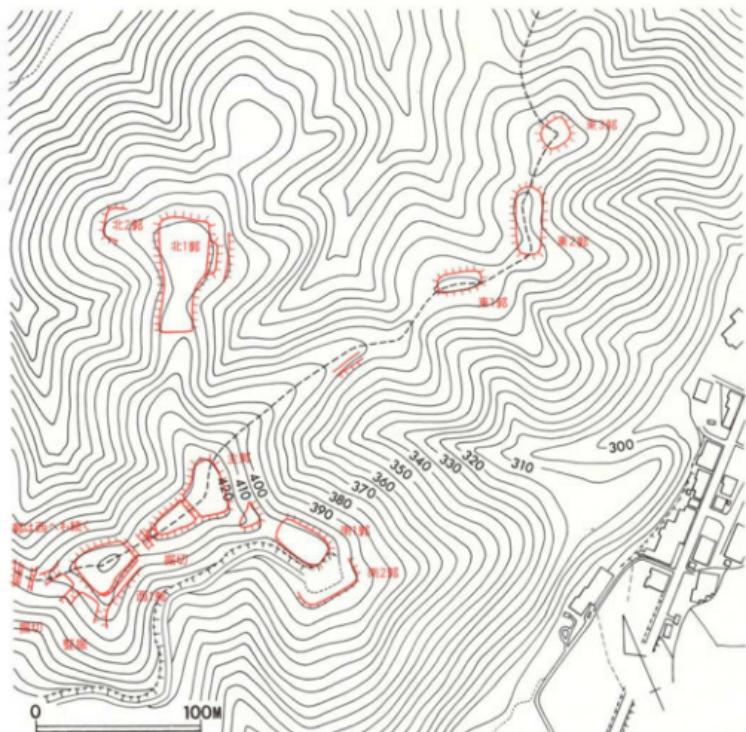
天代遺跡の東側の谷間に存在する。現在も祭祀が行われている形跡がある。宝篋印塔はくずれているものが多いが、4～5個体分は存在する。銘のあるものは存在しないが、その形からみて概ね江戸時代の作になるものと考えてよさそうである。

(4) 高畠宝篋印塔 旭町市木高畠所在

天代遺跡からさらに直線距離にして約180m東側の位置に所在する。南から延る丘陵の北端山際に存在する。この宝篋印塔の東隣には、天代遺跡と同様の、川原石を積み上げた、いわゆる「グロ」がある。墓地と考えられる。宝篋印塔は、ほぼ完全に遺存している。銘はないが、梵字が刻まれている。中世の所産と考えられる。

(5) 西の上宝篋印塔群 旭町市木西の上所在

高畠宝篋印塔から北東に約120mばかりの水田脇に所在する。集積した形で認められる。



第14図 桜尾城跡郭配置図

5. 桜尾城跡 那賀郡旭町市木所在

桜尾城跡は瑞穂町と境を接する標高420mの丘陵上に築かれた城跡である。城跡は北へ突出した丘陵部分で、東、西、北の三方に見晴らしがよく、眼下の集落を見通すことができる。南は退路となる丘陵がつらなる。そして、西は旭町本郷へ、東は瑞穂町へ、北は麦尾を通って松尾峠を越えると石見町に通ずる要衝の地である。

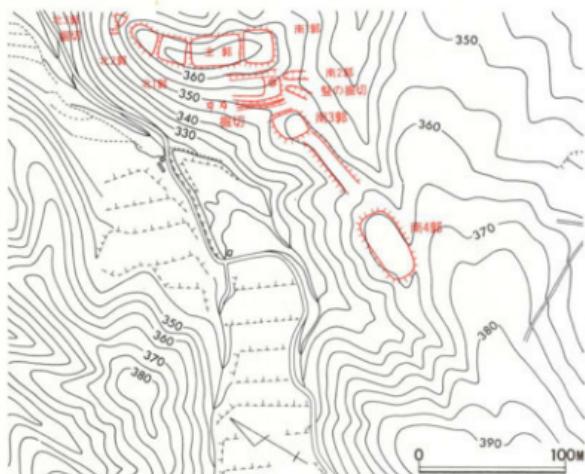
調査した範囲では3カ所の郭群から成っているようにみえる。即ち、主郭、南1郭、南2郭、西1郭などの郭群、北1部、北2部などの郭群、東1郭、東2郭などの郭群である。このうち主郭を中心とする郭群が郭の数が多く、堀切なども備え複雑である。

『石見誌』は「桜尾城市木村城主因幡入道兼旨、御神本氏福屋兼広四世兼行二男因幡守兼宗一輔小太郎重利、永禄二重利毛利の為に市木三坂に敗られ城中に死す」と記す。

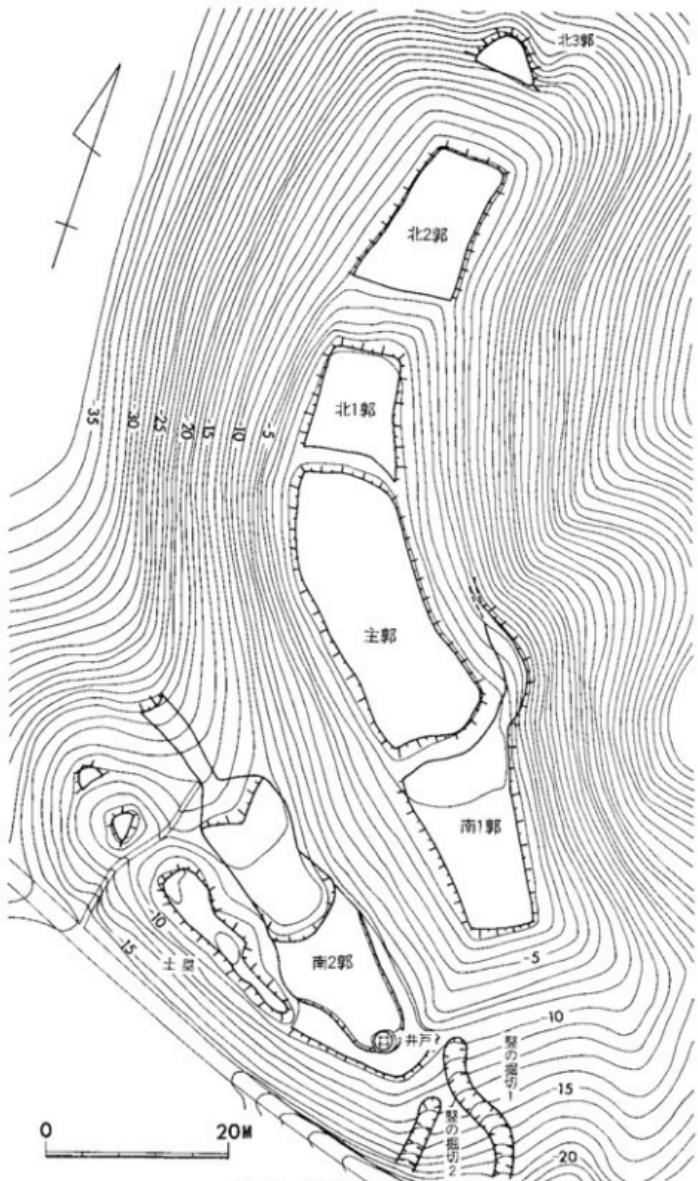
6. 堀城跡 那賀郡瑞穂町市木所在

堀城跡は瑞穂町と旭町が接する瑞穂町側にあって、八戸川の南側に位置する。桜尾城跡の近くで、その東南に所在する。八戸川沿いに広島県大朝に通ずる道路がある。また、上流側は八戸川のつくる観音寺原と生家川のつくる大町原があり、このあたりでは狭い河岸段丘が少し開けるところとなっている。

堀城跡の郭配置は、標高365mにつくられた主郭を中心に北に2つの郭とその下方に小さな郭を設け、南は南1郭が続く。南1郭から急斜面を10~15m下ったところに井戸を有する南2郭がある。広さは36m×12mほどある。西南側に旧地形を生かした土塁（長さ20m幅4~5m）が作られている。井戸は側壁を石積みとするもので直径2m、深さ3m以上を測る。この南2郭の東側斜面には堅方向に堀切りが2条ある。やや緩斜面の自然地形の防備を固める意図があると考えられる。幅



第15図 堀城跡郭配置図



第16図 堀城跡主要部平面実測図

4m、長さ10m以上である。

南2郭の南下方側には堀切りをへだてて南3郭がある。尾根を削平した狭長な成地が50mほど続く。すると長さ50m、幅24mの広い南4郭にいきつく。

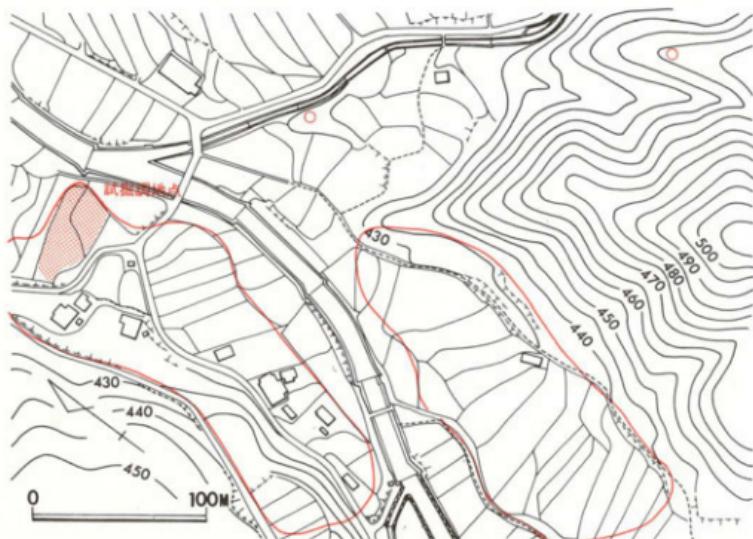
なお、最高所の北2郭から南2郭までの4つの郭の長さは合わせて100mほどである。また、郭、堀切、井戸など各遺構の遺存状況は良好である。

桜尾城跡と比べると郭の営まれている範囲が狭い。桜尾城を守備する外郭的な城とみられなくもない。

堀城跡は「石見家系録」によれば「安芸新庄の地頭吉川経景の臣堀四郎光重によって築かれたもの」という。また、瑞穂町麦尾八幡宮の棟札に「康暦2年(1380)8月26日桜尾城主堀丹後守社殿造營」とあるのでこのころには築城されていたと思われる。(『旭町誌』による)

7. 観音寺原遺跡 瑞穂町市木観音寺原所在

堀城跡の東側に位置する、なだらかな高原状の山地に立地する。鉄穴溝や、「グロ」などが存在する。今回は牧草地を斜面沿いに幅1.5m、長さ10mの調査区を4ヶ所設定した



第17図 橋路橋遺跡分布図

が、遺跡、遺物は確認されなかった。鉄穴と牧草地造成によるものであろうか。

8. 丸瀬山山麓古墳 瑞穂町市木觀音寺原所在

県道田所、國府線の約150m南の丘陵上に所在する。径11m、高さ0.6m程の円墳と考えられる。墳頂には石材の抜き取り痕と考えられる穴があつて、かつては小規模な横穴式石室があつたものと考えられる。

9. 郷路橋遺跡 瑞穂町市木猪子山所在

遺跡は広島県境阿佐山から發する八戸川が県道田所國府線につき当るあたりに所在する。遺物の散布は川を挟んで両側の水田にみられる。今回試掘調査したのは川の西側で、その背後には林道鈴谷線が走っている。調査区は $2\text{m} \times 4\text{m}$ を3ヶ所、 $2\text{m} \times 6\text{m}$ を1ヶ所設定した。耕土を除くと川原石の集石が一面に認められた。八戸川の氾濫によるものと考えられる。ただ、第3調査区においては鍛冶床と考えられる焼土面が認められ、フイゴの羽口が検出された。出土遺物は、陶磁器類が主で伊万里系の磁器などが検出された。近世末の所産と考えられる。

IV ま と め

今回の調査では中国横断道予定地のルート幅 500mを主な対象地として計画したが、急峻な山々に阻まれて、結果としては旭町武富地内、旭町市本地内、瑞穂町市本地内の調査に留まった。今後、実施計画の段階でより詳細な分布調査を実施する必要がある。

石見地方山間部の考古学的調査はやっと緒についたばかりで、不明な点が多い。しかし、それだけに適正な評価を与えられず埋没している資料や未発見の資料も多い。こうした意味において、今回の調査では数々の予期せぬ成果を収めることができたと考えられる。

以下、注目すべき点について述べ、まとめとしたい。

やつおもて古墳群と新塚古墳群は総数22基を数える後期の古墳群であることが明らかになった。時期の明らかになっている古墳は、やつおもて9号墳しかないが、出土須恵器からすると山陰の須恵器編年でIV期に属すと考えられる。石見地方においては、益田市鶴ノ鼻古墳群(一部県指定史跡)、邑智郡石見町中山古墳群などが著名であるが、やつおもて・新塚古墳群は古墳時代後期の限られた一時期に、しかも、横穴式石室を埋葬施設とする古墳群であるという特色を備えている。こうした意味においては、石見地方にあって現時点では他に鶴ノ鼻古墳群しか類例が認められない。

また、この古墳群に接してある重富遺跡は、かつて軒丸瓦・丸瓦・半瓦が出土し重富廢

寺とも接している。重富遺跡ではかつて瓦が出土した地点とは全く別の地点で布目瓦を採集した。試掘調査地点では須恵器片等を検出することができた。土層の状況からは明らかに人為的な整地層を確認することができた。重富遺跡の時期は出土須恵器から見て、奈良時代後半から平安時代に至る時期と考えられた。重富廃寺の出土遺物は圃場整備中に発見されたために資料の共伴関係等、積極的に時期決定する資料に乏しいが、同一の袋の中に須恵器細片が混入しており、一応、図示しておいた。この時期は、重富遺跡に与えた時代とそう大きく異なる時期ではないと考えられた。一方石見地方における古代寺院跡は、大田市波根町天王平廃寺、浜田市因分町石見國分寺跡、同國分尼寺、浜田市下府町所在^{註1}下府廃寺が知られているが、重富廃寺と同様に外^{註2}に鋸歯文を施している軒丸瓦は、天王平廃寺^{註3}、下府廃寺^{註4}でも出土している。内^{註5}の花弁についてみれば天王平廃寺は重弁^{註6}、下府廃寺は単弁であるが、ともに8弁である。形式的には天王平廃寺が占く^{註7}、下府廃寺が新しいと考えられ、重富廃寺はこの間に位置すると考えられる。一応、天王平廃寺系の軒丸瓦と考えておきたい。

ところで、重富遺跡からは第1調査区から円面鏡が出土した。県下での出土地は、安来市佐久保町大原茶畑遺跡^{註8}、松江市大草町出雲國庁跡^{註9}、松江市大井町鈴賀谷遺跡^{註10}、松江市大井町ババタケ窯跡^{註11}、松江市矢田町才ノ峠遺跡^{註12}、飯石郡三刀屋町松本4号墳^{註13}、邑智郡石見町中野法橋遺跡^{註14}、隱岐郡西郷町有木隠岐國分尼寺^{註15}が知られている。従来、鏡は用途の性格上窯跡を除いては、寺院跡、官衙跡などから出土することが多いといわれている。こうしてみると、重富廃寺と、重富遺跡とは場所が接しているばかりでなく、出土遺物、時期に共通する要素が強い。重富遺跡と重富廃寺は一連の遺跡であるということができよう。いずれにしても、やつおもて古墳とも時期的に連続する時期に當なまれており、この地区に石見地方の有力な豪族が蟠踞していたことを示すものである。この遺跡からは放射状を呈す異形タタキの須恵器も検出されている。この種の須恵器が出土した遺跡は安来市門生町門生古窯跡群^{註16}、松江市矢田町才ノ峠遺跡^{註17}、隠岐郡西ノ島町古海などがある。近年、こうしたタタキの須恵器は注目され始めているが、資料増加をまって検討したい。

この他の遺跡では、中世から近世にかけてみるべき遺跡が多く存在した。内ヶ原、桜尾城跡では郭が比較的よく保存されていた。とりわけ桜尾城は郭の配置期切り等立派なもので目を引いた。

郷路橋遺跡では近世の鍛冶跡を検出し、当地方でかつて盛んに行われた鉋による製鉄との関連で注目された。本文ではふれなかったが、八戸川と芦谷川の合流点より上流の八戸川沿いで「鉄穴興首の墓」と刻まれた墓碑が道路脇にある。一大鉄生産地であった往古を

懲ばせるものがある。

- 註1 近藤 正「天王平廬寺」島根県埋蔵文化財調査報告書第II集 昭和45年3月
- 註2 近藤 正編「山陰の古瓦」島根県立博物館 1965
- 註3 大森隆雄氏の教示による。
- 註4 町田 章他「出雲國序跡発掘調査概報」松江市教育委員会 昭和46年3月
- 註5 村上 勇氏の教示による。
- 註6 タ
- 註7 内田伸雄氏の教示による。
- 註8 山本 清「松本古墳発掘調査報告」島根県教育委員会 昭和38年3月
- 註9 松本岩雄氏の教示による。
- 註10 内田律雄「郡岐郷土館所蔵の転用鏡」『八雲立つ風土記の丘』No52 昭和57年2月
- 註11 大森隆雄氏の教示による。出土地は山根地区である。
- 註12 内田律雄氏の教示による。
- 註13 松浦康慈氏の教示による。
- 註14 横山浩一「須恵器に見る車輪文叩き目の起源」『九州文化史研究所紀要第26号』九州大学文化史研究施設 昭和56年3月。

図版1



やつおもて古墳群・重富遺跡遠景（南西から見る）



やつおもて古墳群第9号墳横穴式石室（南から見る）

図版2



やつおもて古墳群第9号墳横穴式石室（北から見る）

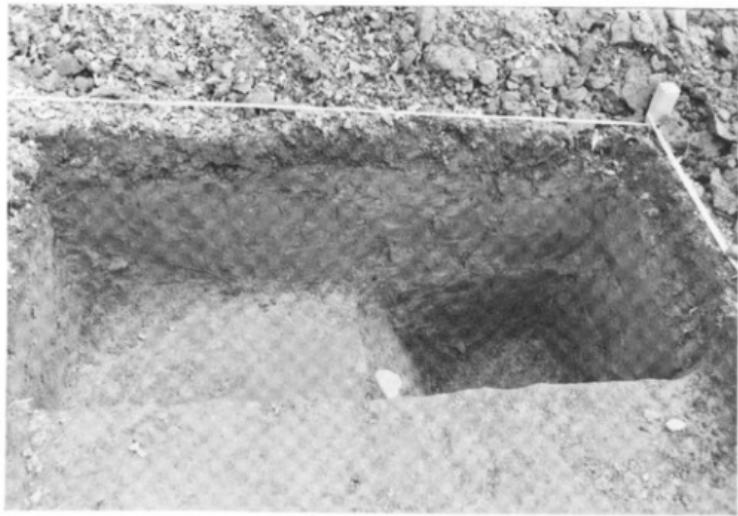


新塚古墳群遠景（南東から見る）

図版3



重富遺跡発掘調査風景



重富遺跡第2調査区（北から見る）

図版4

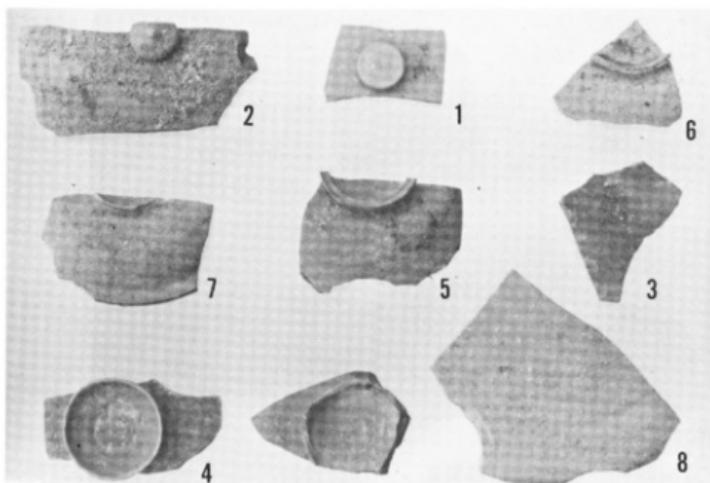


重富遺跡第1調査区（北から見る）

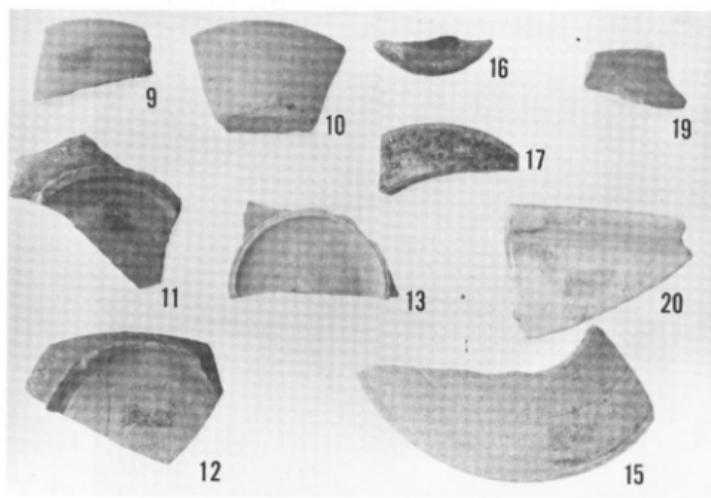


重富遺跡第3調査区（北から見る）

図版5

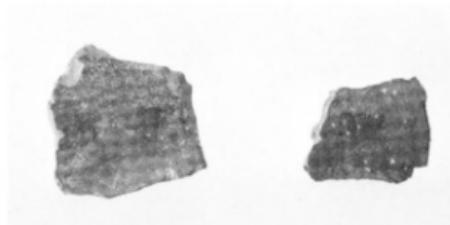


重富遺跡出土須恵器



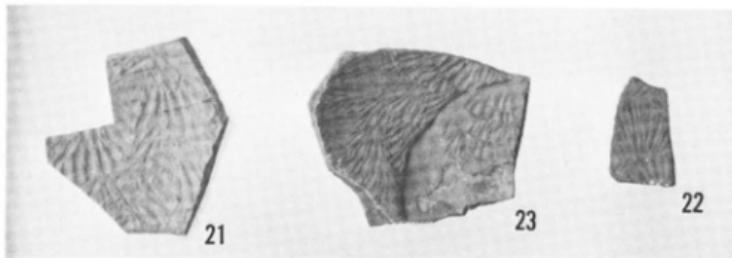
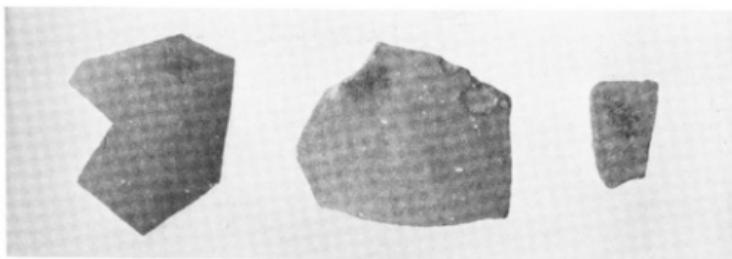
重富遺跡出土須恵器

図版6



重富遺跡出土円面硯

重富遺跡出土布目瓦



重富遺跡出土須恵器（放射状タタキ）

図版7



内ヶ原城跡掘切り（西から見る）



早水遺跡遠景（北西から見る）

図版8



天代宝匯印塔群（東から見る）



高畠宝匯印塔（北から見る）

図版9

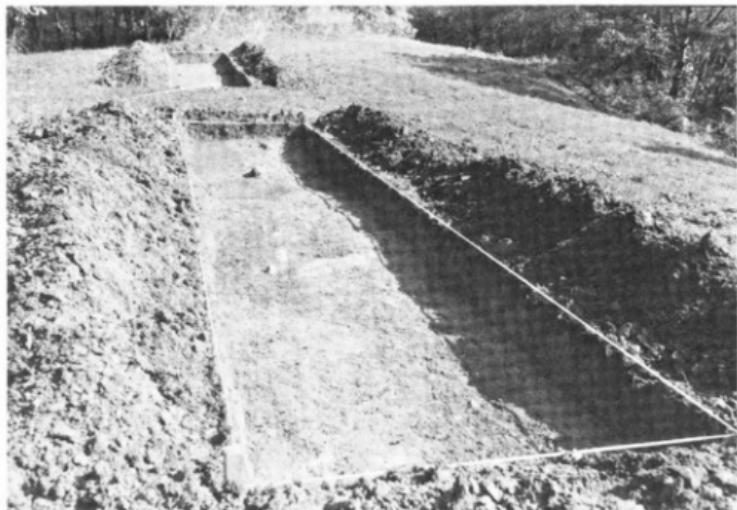


桜尾城跡遠景（北から見る）



堀城跡遠景（北東から見る）

図版10



観音寺原遺跡トレンチ調査状況（西から見る）



郷路橋遺跡トレンチ調査状況（南東から見る）

中国横断道予定地内
遺跡分布調査報告書

昭和57年3月29日発行

発 行 島根県教育委員会
松江市城町1番地

印 刷 株式会社報光社
平田市平田町993

4800